

露口健司・藤原文雄編著『子供の学力とウェルビーイングを高める教育長のリーダーシップ』学事出版（2021）

柏木智子

立命館大学 k-tomoko@ritsumei.ac.jp

本書は、教育長のリーダーシップと子どもの学力・ウェルビーイングとの関連性を解明した非常に先駆的で挑戦的な著作である。日本では、教育長のリーダーシップが子どもの学力向上とウェルビーイングの実現に貢献できるのかというエビデンスはほとんど提出されておらず、それらの関連性は十分に解明されていない。そこで、本書では（1）日本における教育長のリーダーシップ行動の構成要素とは何か？（2）教育長のリーダーシップから学力への影響過程はどのような構造になっているのか？（3）市区町村レベルでのリーダーシップの分散化は、子どもの学力・学校幸福度に対してどのような影響を及ぼしているのか？の3つのリサーチクエスチョンを設定し、校長・教育長への質問紙調査から解明する。教育長のリーダーシップの影響を解明するこうした研究は、教育活動がマクロレベルの意思決定や構造によって規定されている現状に鑑みると重要なものであり、「次世代の学校」の実現に向けて教育長のマネジメントに対する期待が高まっている近年の動向に照らし合わせても時宜を得たものである。したがって、本書は、重要なながらもこれまで等閑視されていた領域にアプローチするものであり、研究的にも実践的にも大きな意義を有する書となっている。

本書の構成は以下の通りである。第1章にて、教育長のリーダーシップの先行研究の精査がなされる。具体的には、米国における教育長のリーダーシップ実践を対象とする研究を、教育・変革・政治・社会正義の視点から整理、検討し、（1）教育長のリーダーシップモデルが、教育的リーダーシップと社会正義リーダーシップの2つに集約されつつあること、（2）教育長のリーダーシップによる学力向上・ウェルビーイングへの影響プロセスの検討の必要性、（3）学区規模や地域特性、予算等の文脈についての考慮の必要性、（4）計量研究の質の向上の重要性が示唆される。

第2章では、質問紙調査データを使用し、教育長のリーダーシップを構成する次元の抽出が行われる。その結果、変革的・教育的・社会正義・政治的リーダーシップが見出される。

第3章では、質問紙調査データを使用し、教育長のリーダーシップが学力向上にどのような影響を及ぼしているのかが分析される。その結果、教育長のリーダーシップから学力への直接効果は見出せず、教育長のリーダーシップから学校の雰囲気、さらに教職員の教育実践力と順次媒介して学力に影響を及ぼす過程が明らかにされる。

第4章では、教育長のサーバント・リーダーシップによる校区の分散型リーダーシップの促進と子どもの学力向上とウェルビーイングとの関係が、小学校区と自治体のマルチレベルデータを用いて解明される。その結果、3年間にわたり学力高位を維持している学区に対する分散型リーダーシップの効果は認められず、

3年間で学力水準が上昇傾向にある校区に対する効果は認められている。また、子どもの学校幸福度に対する分散型リーダーシップの影響は認められていない。ただし、分析結果を総合すると、校区レベルで一定の所得水準があり、地域連携が進展した小規模の小学校において学校幸福度の高い傾向が認められている。さらに、校区レベルの分散型リーダーシップが、教育長のサーバント・リーダーシップの影響を受けている点が明らかにされている。

第5章では、学力上昇傾向にある校区の教育長のサーバント・リーダーシップについて明らかにされる。具体的には、インタビュー調査を通じて、(1) 学力上昇傾向にある校区の教育長のリーダーシップ行動は、サーバント・リーダーシップという観点で説明できるのか、(2) サーバント・リーダーシップを発揮している教育長の具体的な行動はどのようなものが検討される。

これらをまとめると、本書の知見は以下の通りとなる。第一に、量的調査の結果から、「教育長は校区の教育力・組織力を高めたり、校区レベルでの地域連携を支援したりすることを通じて、学力向上及び学校幸福度に貢献できることが確認され」(95頁) た点である。第二に、インタビュー調査の結果から、教育長は「愛他的使命」「情緒的安定」「説得的図解」の3因子からなるサーバント・リーダーシップを学力向上とウェルビーイングの実現に向けて発揮し、リーダーとしてビジョンを示した上で、自らも行動しつつも、一方では、校長や教員を信頼し、任せ、主体的・自律的な思考や行動を期待し、支援をしていた点である。

最後に、本書の特長的な点を3点述べておきたい。1つ目は、量と質の双方を用いた綿密な調査計画と実施から結果を導き出している点である。子どもの学力向上とウェルビーイングの実現は、グローバルな課題であり、それに対するエビデンスの提示が求められている。その中で、本書が目にした教育長のリーダーシップとの関連については、研究蓄積のあるアメリカにおいても計量研究の少なさと必要性が指摘されている。それを日本において実施し、分析した意義は非常に大きい。

2つ目は、教育長のリーダーシップの影響過程の解明と効果検証を行った点である。教育長は、教育リーダーの上位に位置する重要な役割を担いながらも、日本では研究対象として注目されることは少なく、そのリーダーシップに関連する研究の蓄積の不十分さが指摘されている。本研究は、これまでの先行研究の知見に基づきながら、教育長のリーダーシップの構造や影響過程について明らかにしており、今後の研究の基盤となる成果を導出している。

3つ目は、研究書でありながら、実践書としても手に取りやすく、わかりやすく描かれている点である。理解の難しいワードや統計分析に関しては、丁寧な説明が添えられており、初学者にも読みやすいように、研究を始めやすいように工夫されている。また、提示された知見は、実践者が今すぐにでも取り組むことができるような形でわかりやすく述べられている。

多くの実践者・研究者にとって参考となる内容が多く、幅広く読んでいただきたい書であると思われる。